

研究主題

よりよい自分をつくり、ともに生きる力を育む道德教育
～子どもが「考え」「議論する」道德授業の実現をめざして～

I 主題設定の理由

平成25年度の「教育再生実行会議」（内閣に設置）を発端とし、道德教育、道德授業にかかわる議論が続き、平成27年3月に、小学校学習指導要領の一部改正が告示された。これを受け、平成30年度より道德の教科化がスタートした。これは、道德教育、とりわけ、道德授業に対する意識を高めていかねばならないという警鐘でもあった。これは、道德授業の形式化や形骸化、または、効果的な指導方法が共有されていないこと等、多くの課題を克服していくことが求められた結果でもあった。

グローバル化が進展する中で、多文化共生や多様性の受容といった、人々と相互に尊重しながら生きることや、AIに象徴される科学技術の発展や社会・経済の変化の中で、人々の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ること等、急激な変化に対応していく力が求められている。そのような中、子どもを取りまく環境は、家庭や地域社会の教育力の低下や多様な体験からの学びが少なくなっていることにより、価値観が多様化し、大きく変貌していると言われる。結果として、生命尊重の心が培われるのに不十分であったり、自尊感情が乏しくなったりしている。また、基本的な生活習慣が未確立で、規範意識が低下したり人間関係を形成したりする力が低下していると言われる。これらの課題からも、道德教育の充実が望まれている。

道德教育においては、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また、国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道德的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢」が求められており、そのためには、子ども一人一人が考えを深めたり、仲間との議論をとおして、自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深めたりする道德授業の実現をめざす必要があると考えた。

よりよい自分をつくり、ともに生きる力

- 人間として生きていくうえでの基本の型をつくり、他とともに自らの人生を切り開く高い精神と志をもとうとする力
- 自己を見つめ、他を思いやり、感性豊かな心をもつとともに、人間として必要な規範意識を身に付ける力



～子どもが「考え」「議論する」道德授業の実現をめざして～



Ⅱ 研究目標

子どもが「考え」「議論する」道德授業の在り方はどうあればよいかを明らかにする。

Ⅲ 研究仮説

道德授業において、子どもが自ら「考え」たり、子ども同士が自ら「議論する」ための指導方法や道德的体験とのかかわらせ方を工夫すれば、よりよい自分をつくり、ともに生きる力を育むことができるであろう。

Ⅳ 研究内容

1 道德授業の在り方 ① 基本的な考え方 ② 基本的な過程 ③ 指導方法の工夫 ・ 発問の工夫 ・ 板書の工夫	2 道德的体験との関わり の在り方 ① 体験の考え方 ② 道德的体験の考え方	3 家庭・地域との連携の 在り方 ① 連携を図る意義 ② 連携の工夫
		4 評価の在り方

V 研究の実際

1 道德授業の在り方

① 基本的な考え方

学校における道德教育は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性を養うことを目標とする教育活動であり、社会の変化に対応しその形成者として生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割をもっている。

その中で、道德科は、各活動における道德教育の要として、それらを補ったり、深めたり、相互の関連を考えて発展させたり統合させたりする役割を果たす。いわば、扇の要のように道德教育の要所を押さえて中心で留めるような役割をもつと言える。道德授業の中で、子どもたちは、教材に出合い、子どもたちが従来もっている価値観を深めたり広げたりしていく。同時にその過程において、自分の生き方を模索し、自分らしく生きる力を身に付けていくと考える。



② 基本的な過程

一般的には、「導入」「展開」「終末」の各段階を設定する。

(1) 導入について

主題に対する子どもの興味や関心を高め、ねらいの根底にある道德的価値の理解を基に自己を見つめる動機付けを図る段階であると言われる。

- ねらいとする道德的価値、または、取り扱う読み物教材の内容に対する興味・関心をもたせる工夫を行う。
- 本時のねらいとする道德的価値や主題、読み物教材に含まれる道德的な問題に対する問題意識をもたせる工夫を行う。
- ※ 本時のねらいとする道德的価値や主題に即した「めあて」や「学習テーマ」を設定するかどうかについて検討することも必要である。

(2) 展開について

ねらいを達成するための中心となる段階であり、中心的な教材によって、子ども一人一人が、ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に自己を見つめる段階であると言われる。子どもがどのような問題意識をもち、どのようなことを中心にして自分との関わりで考えを深めていくのかについて主題が明瞭となった学習を心掛けることが必要である。

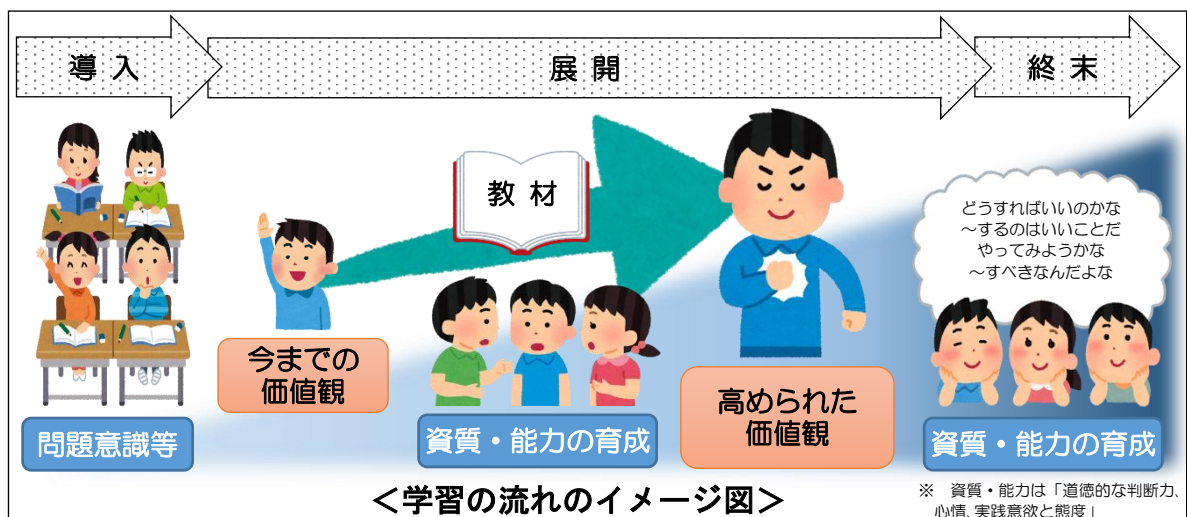
- 教材に主体的にかかわっていける指導方法の工夫を行う。
- 教材を自分との関わりで考え、道徳的価値を理解したり、自己を見つめる学習が行われたりするよう工夫する。
- 教材を基にし、ねらいとする道徳的価値に対して、自己を見つめ、多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深める話合いが行われる指導を行う。
- 教材に描かれている道徳的価値に対する子ども一人一人の見方や考え方や感じ方（以下、価値観）を整理するとともに、多様な価値観にふれさせる工夫を行う。
- 「考え」「議論する」学習を通して、これまでもっていた価値観をより高い価値観へと高めることをめざす。

(3) 終末について

ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認したりして、今後の発展につなぐ段階であると言われる。

- ねらいとする道徳的価値を確認し、これからの生き方に希望を持たせる工夫を行う。
- これからへの思いや課題について考えさせる工夫を行う。
- 学習を通して考えたことや新たに分かったことを確かめたり、学んだことをさらに深く心に留めさせたりする工夫を行う。

以上の学習指導過程は、あくまでも基本的な学習指導過程であり、道徳科の学習指導過程には、特に決められた形式はない。子どもの実態や教材の効果的な活用等に合わせて弾力的に扱う等の工夫をすることが大切である。



③ 指導方法の工夫

(1) 発問の工夫

道德授業における発問とは、子どもが自分とのかかわりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための思考や話し合いを深めるうえで重要である。そのためにも考える必然性のある発問であったり、問題意識や疑問が生み出されるものであったりすることが望ましい。また、子どもの思考の中で当然だと思われたことが、よく考えるとそうでないこともある、というような子どもの思考を揺さぶる発問も有効である。子ども自らが道徳的価値のよさに気づき、その道徳的価値について考えたい、思いを表現したいと思うかどうかは、教師の発問にかかっている。

また、教材の時系列に沿って、道徳的価値にかかわる場面の登場人物の心情を問うものを場面発問、教材の主題やねらいとする価値そのものを追求していくために問うものをテーマ発問として考え、それぞれを効果的に使うことで子どもの思考を深めることができると考える。

	主として場面発問で行う発問構成	主としてテーマ発問で行う発問構成	2つを組み合わせる発問構成
教材のあらすじ	(教材：おふろばそうじ) (文部省教材1年) あきは、風呂場掃除を毎日一生懸命行っていた。ある日、祖父に「あきらのおかげで毎日きれいなお風呂に入れてしあわせだなあ」とほめられる。さらに、父、母、姉にも同じようにほめられ、嬉しくなったあきは、これからも続けていくと宣言する。これをきっかけに、あきは「お風呂場掃除も勉強もぼくの仕事なんだもの」と、自分のすべきことをしっかりやろうとする意欲を高めるのであった。	(教材：しつれいおばさん) (学研3年) 子どもの本がたくさんあるおばさんの家は、学校が終わると子どもたちが遊びにやってきて、急にいそがしくなる。おばさんはいつも「失礼というものよ」とにこにこしながらも、失礼な行いを見逃さず、子どもたちを叱っていた。「汚れた手で本を触るのは失礼よ」「あいさつの声が小さいと相手に失礼よ」等々。しかし、子どもたちは、そんな「失礼おばさん」のことが大好きであった。	(教材：金色の魚) (学研3年) ある日、おじいさんが出会った金色の魚は、何でも願いを叶えてくれる魚であった。おじいさんは願い事をせずに金色の魚を逃がす。すると、おばあさんはそのことに腹を立てたばかりか、おじいさんを、もう一度金色の魚のところへ行かせ、ことある毎に願いを叶えてくれるようにお願いを続け始める。おばあさんの願いは次第に大きくなっていくが、最後は金色の魚が腹を立て、元通りの生活に戻ってしまう。
教師の意図	場面毎に少しずつ高まっていくあきらの心情に共感させていくことが大切であると捉えた。	全体を捉えて、おばさんの心情や「失礼」に込められた思いを考えさせていくことが大切であると捉えた。	まず、よくばりな願いに目を向けさせ、それぞれの場面での心情を捉えさせた後、最終場面でのおばあさんの心情に共感させていくことが大切であると捉えた。
発問 ◇場面発問 ◇テーマ発問	○ みんなにほめられて嬉しくてたまらないときのあきら君は、どんなことを考えていたでしょう。 ○ あきら君はどんな気持ちで「ぼく、やるもん」と言ったでしょう。 ○ 自分の仕事を「みんな、やっちゃうもん」と言ったときのあきら君は、どんな気持ちだったでしょう。	◇ おばさんは子どもたちにどんなときに「失礼」と言っていましたか。 ◇ (子どもの出した答えに対して) これがなぜ失礼なのでしょう。 ◇ おばさんは、いつも、どんな気持ちで「失礼」と言っているのでしょうか。	◇ よくばりをする、どんな気持ちになるのでしょうか。→おばあさんのよくばりは何か。 ○ おばあさんはどんな気持ちでよくばりを行っているのでしょうか。 ○ 元通りの生活に戻ったおばあさんは、どんなことを考えているのでしょうか。 ◇ よくばりを続けると、どんな結果(気持ち)になるのでしょうか。

<発問構成及び発問の例>

上記の分類による発問構成においては、他にも方法が考えられる。教材の中にある道徳的価値のよさに気づかせていくためには、教材を分析する中で、どのように道徳的価値に迫っていけばよいかを考えなければならない。大切なことは、教師が子どもの実態をふまえた上でねらいを設定し、意図をもって発問を構成していくことであるとする。また、発問については、『「特別の教科道徳」の指導方法・評価等について(報告)平成28年7月』に掲載されている、「道徳科における質の高い多様な指導方法について(イメージ)」にある発問例も有効である。

どちらも、教師の明確な意図と型にとらわれない柔軟さが必要である。

(2) 板書の工夫

板書は子どもにとって思考を深める重要な手がかりとなり、教師の伝えたい内容を示したり、学習の順序や構造を示したりする等、多様な機能をもっている。板書の機能を生かすために重要なことは思考の流れや順序を示すような順接的な板書だけでなく、教師が明確な意図をもって対比的、構造的に示したり、中心部分を浮き立たせたりする等の工夫が大切である。

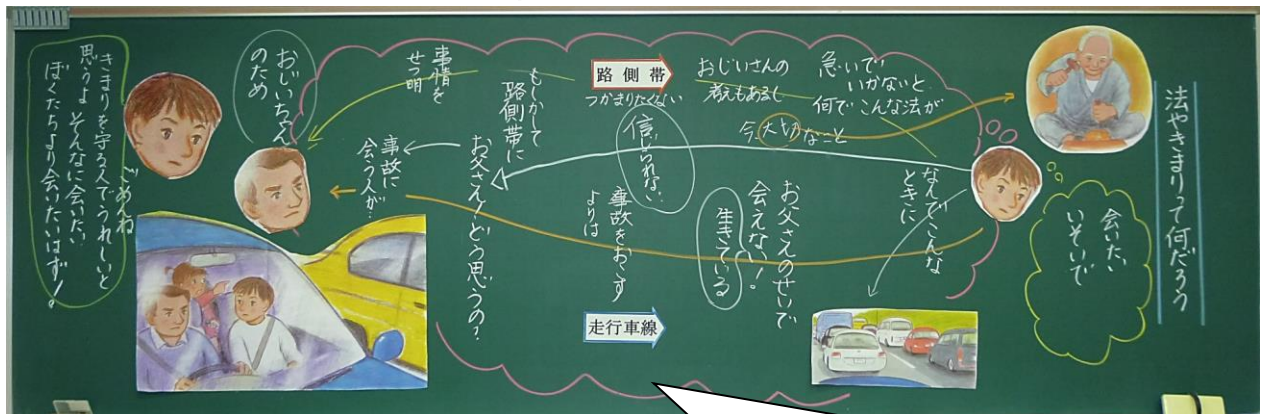
<思考の流れや順序を示した板書例>



立体的、動きのある板書にする。

内容項目とのつながりを明確にする。

<対比的、構造的に示した板書例>



登場人物を左右に示し、行動を上下に示して、教材全体からねらいについて考える。

<中心部分を浮き立たせる板書例>



中心発問から板書し子どもの考えから主人公の心情について考える。

2 道德的体験との関わりの在り方

① 体験の考え方

体験とは、身体的活動や対象と直接的にかかわることだけではなく、そのことによって生じる主観的な感覚、感情、意識の過程も含む。

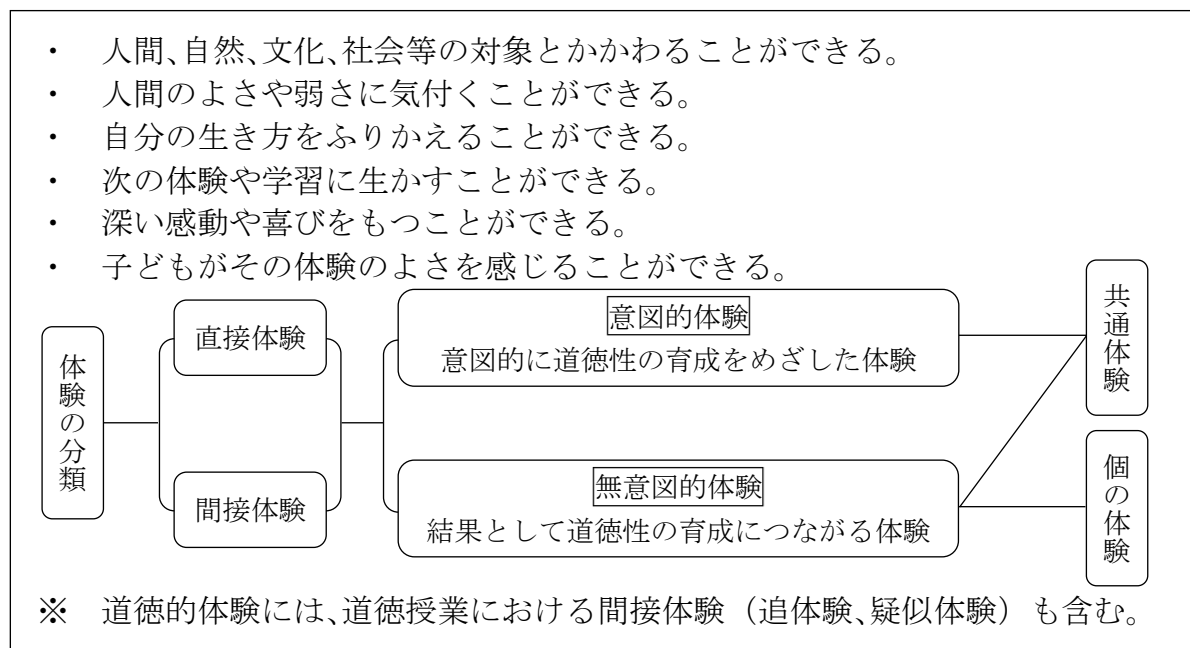
私たちは、身体的活動や直接的なかかわりを通して様々な感覚や感情、意識をもち、考えをめぐらしていく。そして、その感覚や感情、意識が行為の原動力になる。つまり、体験においては、対象とのかかわりにおいて、感じ、考え、判断し、行動することが一体的であると考えられる。

② 道德的体験の考え方

体験には、よいと感じる体験とそうでないと感じる体験がある。

道德的体験とは、どちらの体験においても、それを通して感じたり考えたりして何かをしようとする意欲を起す契機となるような体験のことを意味する。

子どもはそのような体験を経て、感動を味わうことになる。つまり、道德的体験とは、子どもが様々な対象とかかわりながら、その体験に主体的に取り組み、それが深い感動や意欲を呼び起こし、そこから、次の体験や学習に多様に展開し、発展していくような体験のことを言う。以下のように「道德的体験」を捉え、次のように整理した。



(1) 体験を生かす

教師が道德的体験を事前に把握しておき、道德授業の中で、個への支援に生かしていくと、道德的価値の理解が深まると考える。さらに、道德授業での気付き等を日常生活の場での助言や称賛に生かすことで、道德的な判断力、心情、実践意欲と態度が高まるようになる。したがって、子どもの体験を常に把握することに心がけることが、道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育むことのできる道德授業の実現へとつながると考える。

(2) 各教科等との関連を図る

各教科等における道德教育と道德授業のねらいが同じ方向をもつとき、学習の時期を考慮したり、相互に連続させたりすることによって、関連する一連の道德授業を一つのくくりとして総合的に進めるものとして捉えられる。各教科等で行われた道德的体験との関連も図ることができる。

3 家庭・地域との連携の在り方

① 連携を図る意義

道德教育の指導は、道德授業と学校や家庭・地域における道德的体験との関連を図りながら推進していくことが大切である。それは、子どもが学校や家庭・地域社会における道德的体験から感じたことや考えたことが道德授業に生かされたり、道德授業に培われた資質・能力が日常生活の場で生かされたりしたときに、子どものよりよく生きたいという夢や思いが、連続してふくらんでいき、自己の生き方をつくりあげる基礎となるからである。

② 連携の工夫

(1) 観点や手順について

観 点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どものよりよく生きようとする思いの連続性 ○ 道德授業の「目標」「内容」「取り扱う資料の内容」 ○ 道德授業の「内容」と重なり合う学校や家庭・地域社会での道德的体験
--------	---

※ 道德授業において、どのようにすれば子どものよりよく生きようとする思いの連続性が生まれるかということを大切にしたい。

手 順	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各学年の重点内容の精選 ○ 道德授業のねらい、内容の分析、取り扱う教材の選定・分析（重点内容について） ○ 学校における教育活動（各教科等、特別活動、その他の教育活動）の目標や内容の分析 ○ 道德授業と重なり合う学校や家庭・地域社会での道德的体験の位置付け（事前、事後）の検討
--------	---

(2) 通信等による啓発活動

学校における道德教育への理解と協力を家庭・地域から得るためにも積極的に道德授業の内容等について公開していく必要がある。道德授業を公開することはもちろんであるが、継続的に啓発していくためにも通信等で発信していくことが重要であると考えられる。また、保護者に道德授業への直接的な参加やアンケート、子どもへの手紙等への協力依頼、事後の指導に関する依頼等についての通信等が有効であると考えられる。

また、道德の年間指導計画を基に、他教科等との関連や道德教育にかかわる体験活動や実践活動、及び家庭や地域社会との連携を明確にしておくことで道德授業との関連を図った指導を確実に行うことができる。これらを踏まえ、学校の実態等にに応じてつくり出すことが望ましい。



4 評価の在り方

道德授業の評価は、教師にとっては、指導の目標や計画、指導方法の改善に取り組むための資料となり、子どもにとっては、自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくものでなくてはならない。これは、道德授業の評価そのものが、指導に生かされ、子どもの成長につながるものであるという指導と評価の一体化を表すものである。

道德性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道德性が養われたか否かについては、容易に判断できるものではない。また、道德性の諸様相でもあり、道德授業において育てるべき資質・能力でもある道德的な判断力、心情、実践意欲と態度のそれぞれを分節し、観点別評価を行うことも、子どもの人格そのものに働きかけ、道德性を養うことを目標とする道德授業の評価としては妥当ではない。

しかし、道德性を養う道德授業においては、その学習状況や成長の様子を適切に把握し、評価することが求められる。その際、個々の内容項目ごとではなく、学期や年間を通した大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすることや、他の子どもとの比較ではなく、一人一人を積極的に受け入れ、いかに成長したかを個人内評価として記述式で行うことが求められる。

これらを踏まえ、子どもの学習状況の様子や以下の評価の視点を基に評価を行う。

○ 一面的な見方から、多面的・多角的な見方へと発展させているかどうか。

- ・ 道德的価値にかかわる問題に対する判断の根拠やその時の心情を様々な視点から捉え、考えようとしているかどうか。
- ・ 自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしているかどうか。
- ・ 複数の道德的価値の対立が生じる場面において、取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしているかどうか。

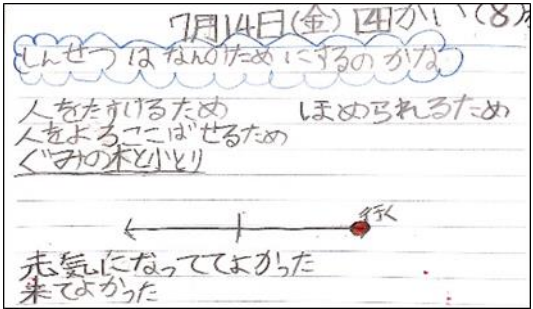
等

○ 道德的価値の理解を自分自身とのかかわりの中で深めているかどうか。

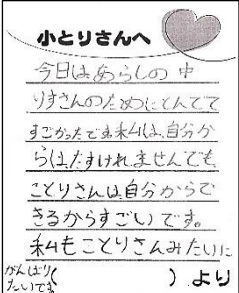
- ・ 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしているかどうか。
- ・ 現在の自分自身をふりかえり、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる部分に着目しているかどうか。
- ・ 道德的な問題に対して自己の取り得る行動と他者と議論する中で、道德的価値の理解をさらに深めているかどうか。
- ・ 道德的価値を実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしているかどうか。

等

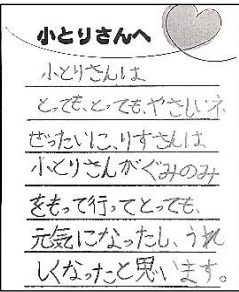
<多面的・多角的な見方への発展を促した評価例>

評価記述例	評価の根拠 (道德ノート)
<p>主人公の迷いを図に表しながら考えていく際には、親切にすることについての考えを、図に表したことを根拠としながら隣の友達に説明し、話し合いを通して考えを深めていくことができました。</p>	

＜自分自身とのかかわりでの価値の深まりに関する評価例＞

評価記述例	評価の根拠（主人公への手紙）
<p>親切にできた主人公への手紙では、親切にできた主人公への称賛を通し、主人公へのあこがれをもつことができていました。親切にすることのよさや大切さに気付いたことが表現されていました。</p>	 <p>小とりさんへ 今日はあらしの中 りさんのおかげで まごめまごめは自分 らはなまけれませんでも ことりさんは自分からで きるからすごいです。 来4もことりさんみたいに かほり たいです)より</p>

＜学習状況の評価例＞

評価記述例	評価の根拠（主人公への手紙）
<p>親切にできた主人公へ手紙を書いた際には、主人公への称賛の言葉に加え、親切にしてもらった相手の気持ちを想像した記述があり、親切な行為がもたらすよさについて考えることができていました。</p>	 <p>小とりさんへ 小とりさんは とて、とて、やさしい ざたいにりすさんは 小とりさんがくみのみ をもて行ってとて、 元気になったし、うれ しくなりました。</p>
評価記述例	評価の根拠（発言記録）
<p>主人公の迷いを考えていく際には、友達が説明した図を用いて、違った視点から意見を述べることができました。友達の考えを受け入れた上で、考えの根拠を明確にして発言することができました。</p>	<p>（迷っている立場から）台風が来たから行けないし、でも、約束をしたから行こうかなって迷っているからです。</p>

○ 多様な表現方法を生かす

道德の学習では、自分の「思い」を表現することとなる。それは資料を通した他者の「思い」であったり、自分自身をふりかえったりするときの「思い」である。それらの「思い」を、書く活動や話し合い、図などを使うことで、一人一人がより「思い」を表現しやすくなると思う。

○ 指導と評価の一体化を図る

自分の「思い」について評価することで、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度が養われると考える。そのために、授業で使用するプリント等に様々な方法で表した思いを子どもが相互に評価することで、道徳的価値を深めることができると考える。また、子どもの思いについて教師が評価していくことで、子どもの道徳的価値に対する思いを持続させることができると考える。こういった評価を通して、道徳的価値について、絶えず子どもに投げかけていくことで、豊かに感じ、響き合う道德の時間がつくられていくと考える。

上記のような内容についても今後さらに研究を深めていく必要があると考えている。これらの研究内容を核として、「よりよい自分をつくり、ともに生きる力を育む道德教育」を宮崎県全体で取り組むようにし、「生きる力」をもった子どもを育てていきたいと考えている。